

せだかむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第六十一号（一日発行）
平成六年十月一日

北海の古平風土物語（二七）

3. 津軽ヘントコさん

大正十五年・高等科二年 担任 千葉信夫先生

高橋源五口

津軽の「あんさま」の話で笑いが続いた。やがて夕飯を終えたと、あんさまは、「へんとこや」「へんとこや」と言う。古平のトンチ名人という異名をとる下船頭（故堀川留作さん）もキョトン。側にいた次兄（故小野寺利助）もきよろきよる。通訳？ をすると、

「銭湯はどこにあるのか」と、聞いているのである。所変われば名も変わる、ということか。これで、またまた大笑い。この晩から、津軽のあんさまは「津軽ヘントコ」、略称「ヘントコ」の愛称で呼ばれることになったのである。

× × ×

翌朝の飯時に、船頭は「ヘントコさん」に、「鯨場の仕事は分かっているのか」と、聞いた。

「わ、じゃっぎど、まやごへんこれは、「自分は全く知らない。駄目だ」とのことであった。

それで、「沖働き」は、鯨つぶし。鯨割き、などには不向きであったが、骨格が太くて力があるというので、鯨もつこ背負い、鯨つぶし方の前掻き、つないだ鯨連（にしんつら）の担ぎ運搬、鯨のなや掛け、笹目や白子の干場への運搬、数の子コガ（大樽）の水替え、鯨網の掛け干し、なつ石（重し）運びなどと、力のいる仕事をしてくれることになった。

私は、前の年から鯨の尻繫ぎをさせられていて、納屋までの担ぎ運搬に苦しみ、みんなから冷やかされてばかりいたが、今

年は、ヘントコさんのお陰でずいぶんと助けられた。津軽ヘントコさんは鯨場の神様であった。

× × ×
仕事のいっづく休みにになると私のことを、

「まずめえ（松前）のあんちゃめえねす」

「手あんべえ、いいす」

などと、尻繫ぎの早いこと、手さばきの良さをほめたてる。ヘントコさんは、腰に差した、ずぎり（キセル入れ）を

● 鯨漁のこと

鯨製造法 ①

鯨のワタ（内蔵）をとることを、鯨をつぶす。というが、これはアイヌの女がやる仕事となっていて、つぶした鯨をつなぐのがアイヌの男の仕事である。シャモ地（和人の住んでいる所）では、十四尾つないだものを一連（つら）といい、十三連を一束（百八十二尾）というが、蝦夷地では二十尾を一連、十連を一束（二百尾）としている。

抜き取り、刻みたばこを吸いながら、きまって、自分の持っている津軽名産の「ばか塗り」の胴乱（たばこ入れ）をなでながら、ニコニコ顔で自慢する。

「これ、わほ（わが方の）ばが（馬鹿）塗りだえ」と言うので、古平トンチ名人や次兄は、

「馬鹿だば、じゃっぎど、まやごへん」と、覚えたばかりの津軽弁ではやしたて、掛け合い漫才になる。はやされたり、からかわれたり、これが隣り近所にかけて大評判になった。

これを納屋場（納屋）浜辺に柱を立てて横に木を渡し、そこに束ねた鯨を掛けて干すへ運ぶ。

曹谷（宗谷）では、人の背丈の高さで、長さは三十間程で何列も並んでいる。ここで一日くらい干してから、頭のきわから尾のきわまで両側を切り裂くが、尾のつけ根は付けておく。これを身欠き鯨という。外割（ほかわり）というのは二つに割るので、片方には骨がついている。

アイヌの《ことわざ 世間ばなし集》から

敬老の名簿に 吾が名が載る齡に

人ごとと思っていたのに、私に役場から出席の知らせがあった。驚くことでもないが改めて「老人宣告」をされたような気分でもある。「新歳時記」を調べてみたら、「九月十五日、昭和四十一年（一九六六）に国民の祝日として制定された。老人福祉の充実と敬老精神の啓蒙を主旨とした行事が催される」と

故郷を想う 福井孝平

書いてあった。悪いことでも、自慢することでもないが、人を敬うということも立派なことであるし、特に老人を大切にすることというのは自らを大切にせよとのことか？ 今日まで生きのびて、恙（つつが）なきことを感じて、謝しなければならぬ。幸せなることを素直に喜びたい。健康である限り、齢（よわい）のことを忘れて大いに頑張ってみよう。「老害」をかえりみず余生を送りたいと思う。

それにしても暑い夏でした。何年ぶりかで子どもたち（古平中女子ソフトボール部員）と幌武意の合宿に同行したり、美国海洋センタープールに、十日ばかり水泳の研修を兼ねた講習会に参加したり、強行スケジュールを頑張り通せたことに満足しています。

ついでに来る十月十日の「体育の日」恒例の『古平健康祭』に多数ご参加下さるようご案内申し上げます。他町村の方も気軽にお願いで下さるようお待ちし

ております。

詳しくは、古平教育委員会にお尋ね下さい。当日は晴天でありますよう今から楽しみにしております。もちろん多少の雨でも決行するのでお含みおき下さい。

新橋を渡りそめたる蜻蛉かな
川渡る蜻蛉見ていて昏れにけり



戦況及者慰霊祭りに出席

戦後五十年

ご冥福をお祈りして

渡辺 ハツエ

八月二十五日、町の戦没者慰霊祭が行われました。この日、私は早朝から半旗を掲揚し、役場の送迎バスを利用して慰霊祭に出席し、参拝をして参りました。久しぶりに国歌を歌い感慨無量でした。

主人の弟が、終戦を前にして八月十日、沖縄の激戦地で戦死し、わが家も戦没者遺族になってしまいました。

省みますと、昔は『招魂祭』といって、宵宮祭も行われていたものです。私が生徒だったころは先生に引率されて、招魂祭に参拝したことを記憶しております。神社の境内では、銃剣術の試合や子ども相撲などの余興のほか、沢山の露店も並んでいて賑やかなものでした。

招魂祭に出席した遺族には、そのあと映画観覧の招待があつて、私は前もって時間を打ち合わせ、母と入れ替わって映画を見たことを懐かしく思い出して

おります。当時は、娯楽といえば活動写真といわれていた映画ぐらいでしたから、きっと母は私にも映画を見せたかったのだと思います。

今は時世も変わって、招魂祭も慰霊祭となりましたが、この日、町内の各家庭で半旗の掲揚が見られなかったのは寂しいことでした。

人生永くなると、いろいろと思ひ出すことが多くなるもの、そんなこのごろです。

「積丹半島の一漁港、自ら白鳥古丹と呼んでいる古平に、私の鎮魂歌の碑が建つたので招かれて行った。碑の裏に、日露戦役以来の戦没者二百二十人の名前が彫られている。私のふるさとの地だ。碑面の一句八野につみて花はむらさきと短冊に書いて、遺族へ贈るせめてもの手向草（たむけぐさ）とした。

吉田一穂『海に降る雪』より

遙かなる故郷の思い出 1

榎橋 美我 春吉

「振り返れば、遙か遠く故郷が見える——」
これは歌手・美空ひばりが歌って大ヒットさせた。川の流れるように、の歌詞の一節だが、故郷を遠く離れた私たちには、なにか胸にジーンとくるものがある。

故郷・古平で暮らした歲月より東京での暮しの方が、何倍も永くなってしまったわけだが、なぜか故郷にこだわる私には、やっぱり故郷は偉大であり、思い出がいっぱいあり、何物にも代え難い、ほのぼのとしたものが私の心をゆさぶる。年齢を重ねるごとに望郷の念がますます熱くなってくる。なんだかよく分からないが、これが故郷をもつ者のぜいたくなのかも知れない。

たまたま、『せたかむい』に思い出話でも書いてみませんか、というすめがあつたので、むかしの綴方でも書くつもりで、思いつくまま、何回か書いてみることにした。

あぶらこの話 (一)

小学校三年生ころの夏休みみだつたと思うが、悪童仲間？で丸山岬の一番岩に泳いで行き、岩の高い所から海を見た。岩の下は谷のようになっていて、昆布が辺り一面に生い茂り、波に揺れていた。何の気もなく底を見ていたら、突然、昆布の間から大きな魚が現われたかと思うと、さっと昆布の中に姿を隠し

には黙っていることにして、急いで家に帰ると、早速、釣りの準備を始めた。

私の祖父は漁師だが、趣味として磯釣りが好きで、その腕前は名人級だと言われていた。その祖父の釣ざおを見よう見まねで自分で作ることにし、分教場近くの笹やぶで笹竹を採り、竿のガイドは針金を曲げて取り付け、どうやらさおらしいものが出来た。ガヤ針とおもりは祖父の物を無断で借用し、これで釣りの準備は完了した。

翌日、一人で釣ざおを担ぎ、

一番岩を目ざして出かけた。途中で、餌にするシオ虫（舟虫）とガニツブ（ヤドカリ）を採るのに大分手間どったが、お昼近くになって、さきの大物の現れた場所に竿を下ろすことができ

た。しかし、それからいくら待っても当たらない。さては昨日の大物はどこかへ逃げたのかなと、少し心配になってきた時、グーッとさお先が強く引き込まれた。「それきた！」と、竿を上げたら、なんとペロカジカ

の大きいヤツであった。

国営草地開発事業記念碑

古平・美国町の畜産経営農家は規模が小さく、これを拡大することは困難であった。それで公共の育成牧場を作り、乳牛や肉牛を預かって放牧をし、地域の畜産経営の安定と向上を図ることを目的に、この事業が進められてきた。

約二十七億円の事業費のうち、国費と道費で二十五億円弱を負担し、九

平成五年三月
古平町長畑沢民之助
建設費用 二百万円
施工 古平町・小田嶋組

年を年月をかけて平成五年に竣工した。
同年五月二十八日、竣工を祝って記念碑の除幕式が行われた。

記念碑
牧場に
草を食む
牛の群れ

私の見たにしん場風情

竹内 コト

にしん場支度

ずいぶんと遠い昔のことのように思いますが、私の小さいころから見聞きし、体験した鯨場の様子を、思い出すままに書いて見ることにします。

当時、沢江村（今の沢江町）で鯨漁場を持っていた、〇（屋号ワイチ）松尾市太郎漁場での様子からたどってみます。

三月に入ると、この親方という人は札幌からやって来るとです。そしてまず、神仏をいねいに余念なく清めます。それからひと冬を越した番屋の内外の様子を見て廻り、津軽方面からの若い衆（ヤン衆）の来るのを待っていました。

やがて若い衆が来ると、三月半ばのこと、雪が段の山になっ
ていきますので、まず雪割りから始まります。大きな鋸を使って四角く雪を切り、そりに積んでは海へ捨てます。道をつけ倉を開けて、いよいよ一年ぶりの仕事が始まるのです。

こうして網を建てる準備が万端整うと、三月二十日ごろから好天の日を選んで出漁の準備です。このころになると、番屋の中も活気にあふれてきます。若い衆の食事の支度などは、ご飯炊き（めし炊き）に女の人が来るぐらいで、かしき（炊）とい

【△7日はこんな日】

古平小学校開校六十周年記念
— 記録に見る開校記念日 —

昭和十年（一九三五）十月、古平小学校開校六十周年記念行事が、五日間にわたって盛大に行われた。記念式に先だつて五日には、物故した児童・職員百二十四名の慰霊祭が禅源寺で、六日には児童千六百余人と、ほかに四百五十人余が参列して記念式典と、午後には祝賀会が開かれ、児童には、お祝として紅白のまんじゅうが渡された。夜

ました。たまには本州から夫婦者が来て、その女の人をご飯炊きをすることもありですが、ほかに番屋の中には女はいませんでした。ご飯炊きの中には、釜に付いたこげを干してとって

おいて、それを袋に詰めて帰る時に持って行くという人もいました。お米のご飯は、それだけ大事にしたのです。鯨漁に備えてドンザや手ぬぎ、手甲、きやはんなどの縫い物があります。女は家事だけではなく、座ると針仕事に精をだし、体の休まる暇もないほど忙しいのです。

にはちようちん行列が行われる予定だったが、あいにくの雨で延期された。七日は、午前九時から旗行列が、午後には学芸会が行われ、二千数百人の父母が会場となった広い運動場をうめた。
また、五日から八日まで、記念展示会が十五の教室を会場にして開かれ、多くの人が観覧に訪れた。

延期されていたちようちん行列は、九日、らっぱ鼓隊を先頭に賑やかに町内を廻り、沿道で町民の大歓迎をうけた。

この年、昭和十年は鯨の不漁の年であったが、校下を挙げてこれを祝い、祝賀協賛会には四百五十人余りが名を連ねた。

さてそれから六十年、その古平小学校が来年、開校百二十年を迎えることになる。平成七年（一九九五）の百二十年前といえば、明治八年（一八七五）であるが、古平小学校の開校については、ほかの記録がある。

●北海道志（開拓使編）

二七、学校の部によると

「明治六年 浜中学校開校」

●開拓使事業報告書では

「明治七年 官舎をもって仮教育所、生徒七名」

「明治八年 真宗寺院をもって教育所、費用は郡内で負担すること、寺を壊し新校舎を新築」とある。

古平小学校では、明治八年を正式に開校として六十周年記念式を行い、それから後は、これに足し算をして、それぞれの開校記念日を設定してきたようである。